

德意志帝國紀念

金木土部部

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

（附錄）

25132

T 1A1

22

Mi 77

函崎小學

夜握

圖書 和図書 迦



a1380321871a

福岡教育大学蔵書

修身初訓卷之二

緒言

此篇ヲ初等第二年後期ニ
用井ル所トス第一章敬身
ヨリ起リ衣食之ニ次キ人
倫之ニ次キ處事之ニ次キ

修身初訓 卷之二
勤學之ニ次キ堅志ヲ以テ
終ル凡ソ修身ノ書之ヲ讀
メトモ履行セサレハ讀マ
サルガ如シ

編者誌

修身初訓卷之二

宮本茂任編輯

宗盛年校閱

第一章

○孔子曰く言忠信行篤

敬をらへ、蠻貊の邦と雖
行われむ

○心を立るゝ忠信欺り

をもを以て、主本と以て胡文定

○人道ハ、唯忠信ハあり

君父ハ事ふるも、誠信ハ

けきハ、忠孝ハ非、大和俗訓

○孔子曰く、門を出るハ

大賓を見るゝ如く、民を

使ふハ大祭を承るゝ如

○敬ハ徳の聚る也、能敬

すきハ必徳あり、
○敬すれハ、萬善俱ふ立
ち、怠きハ、萬善俱は廢る、

真西山

○凡る百事の成るや必
敬あるふ在り、其敗る

や、必之を慢るふ在り、
子荀

○安樂なる時も、敬すへ
、敬あるハ、後の禍なく

後の悔なく、
初學訓

○敬ハ、古の聖賢の心法
なり、万善是より行はる、

同上

○凡そ門を開き、簾を掲
るふ、徐く、輕手し、震驚せ
志む可らば、童蒙須知

○器物を執てハ、必端嚴
し、唯失する可らん

おとを恐る、同上

○凡そ夜行くふ、必燈燭
を以てす、燭なけむハ則
止む、同上

○凡そ外ふ出てハ、歸
及て必長上の前ふ於て

揖をふ
せ、暫出
つと雖
亦然り
同上

○藤右



相三守夙ふ大學ふ入里
經を受く後學生に遇ふ
必車より下る

第二章

○男子三緊あり頭緊腰
緊脚緊をいふ頭巾條帶

鞋襪此三の者緊束を要
に、童蒙須知

○凡そ衣服を脱ぐハ必
齊整箱篋中へ摺疊せ
よ、同上

○破き綻れば則之を補

綴す儘補綴するハ害な
し唯完潔なるを用ふ
同上

○凡そ勞役小就く小大
上襲の衣服を去れ唯短
便を著愛護して損汚せ

志むるなかれ同上

○凡そ飲食を喫するは
揀擇し去取するからん

范益謙座右戒

○蔬食口小馴るは味あ
るて肥濃なるを羨むは

且淡薄なれは身を養ふ

小宜し樂訓

○禮記小曰く酒は以て

老を養ふ所なり以て病
を養ふ所なり童子慾小

飲へき理あらん童子訓

○玩物を寶とする者之
を藏る日ハ多―て之を
賞する日ハ少―
張魯叟

○物を玩ふハ三の費ハ
一ハ功を費―、二ハ賤
を費―、三ハ氣を費す
初学
知要

○人知足の理を忘る可
らず、足るを知きハ貧賤
み―て樂―、足るを忘ら
されハ富貴を極きとも
猶阿またらに
樂訓

○賤利を貪て義理を捨

るハ雀を捕ん爲寶玉を
擲つゝ如く

初學訓

○宋司馬君實乳兒の時
より華靡を喜ば長者加
るふ金銀華美の服を以
すれハ羞赦して之を棄

去きり

第三章

○聖人の道ハ五倫を以
て宗として父母ハ孝を
盡すを五倫の初とす
○凡そ父母命ある事阿

初訓

らハ慎てまゝ務て早く
行ふハ同上

○人倫の内ハ交久
まハ兄弟より其親と久
しきを樂むハ同上

○兄ハ父ふつき貴ハ弟

ハ父母の子ナレハ我子
よ王愛すベハ同上

○曾子曰く親戚悦ハ
れハ敢て外ハ交ら
○氣を下し色を怡
聲を柔ふ事ハ特父母

事て然るへきのみを
らす已ふ處一人を待つ
皆此六字を體あへ
○朋友の間ふ於て其敬
を盡とする者日ふ相親與
效を得るふと最速うな

程伊川

○凡そ朋儕の中ふ在て
切ふ自滿を戒む惟虚く
す故ふ能受く満きハ則
容るゝ所なり

許平仲

○凡そ長者の側ふ侍る

ふ必言を正く手を拱
ふ問ふ所あらば則誠實
ふ對ふ言妄まらばから
す童蒙須知

○事を人ふ問ぐ虚懷
を要し毫も挟む所ある

へからば言志老録

○人ふ替て事を處する
へ周匝を要し稍缺く所
ある可らば同上

○人と才能を争ふ可ら
ず人と威勢を争ふへか

初学
 藤原
 吉野少
 まよ
 遊學
 手巻を



釈す仕て中納言小至
 二親堂小在る定省虧る
 出となし

第四章

〇孔子曰く人遠き慮な
 けきハ必近き憂あり

○戦々慄々、日一日を
慎む、人山ヲリツカふ蹟く事なく
志て、埴アツツカふ蹟く、堯戒
○人皆小害を輕く、微事
を易アヤシり、以て悔アハレる者多
く、同上

○患至りて而後之を憂
る、是病む者已倦モウツクいて
而て良醫を索るゝ如く、
同上

○已末善ならざる人
之を譽るとも喜ぶ、是

らに已善あらん人之を
毀るとも怒はる足らに

薛文清

○口モ悶モふして煩志を
厭ふ者決して成るべ
とある理を顔子家訓

○煩イきふ耐る二字最
妙能煩志ふ耐へハ天
下何事々做す可らさら
ん費元祿

○君子患なき時ふ當て
常ふ患を思ひ豫之を防

けハ、則終小患なり

初学知要

○孔子曰く、小忍ひされ

ハ、則大謀を亂る

○盛怒の時小當て堅く

忍て動うず心の平なる

を俟ち、審ふて之小應

まへ、失なまら小庶幾ら

ん、許魯齋

○凡そ我才能小誇て争

ふ、禮義小あらす獸の

角牙を以て争ふ、如く

大和俗訓

○事を處すは二法あり
一、知以て可否を別ち義
以て取捨を決すれハ斯
過舉なる薛文清

○堯の時洪水あり舜禹
を舉て之を治め志を離

身を勞し思を焦し外に
居ること十三年三たび
家門を過られとも入ら
ず孔子之を賢とせり

第五章

○子思曰く君子の道を

譬つゝ遠きふちくふ通
よりするゝ如く譬へハ
高きふ登るに卑きより
するゝ如く

○聖人の尺璧を貴むに
あて、尺寸の陰を貴ふ、
淮南子

○盛年重て来らず一日再
晨なり難時ふ及て勦勵
すへし歳月人を待す、
陶淵明
○大禹ハ聖人ふて乃
寸陰を惜めり衆人ふ至
てハ分陰を惜むへし、
陶侃

○生まれて時ふ益なく、死
して後ふ聞ゆるあとな
まゝ、自棄あま、同上

○學を為る、一日を一日の
効を見る處、一月を一
月の効を見るへ、朱晦菴

○閑話を説くなかれ、恐
くわ光陰を費さん、雜書
を読む勿き、恐くわ精力
を分たん、同上

○橘岑繼初學を好まず
仁明帝の誠を聞き、慙て

學を勵み、官中納言ふ至
きて、

第六章

○大戴禮ふ曰く、高山ふ
升らされハ、天の高さを
知らず、先王の道を聞

さきハ、學の大なるを知
ら

○天地の性人を貴と
苟道を聞うされハ、誠ふ
禽獸と異なるふとな

初學知要

○學ハ志を立てる者と勇
猛なり志むる處、自進む
こゝにある處、朱晦菴

○書小曰く惟學ハ志を
遜り務て時小敏すきハ
厥修る處と乃來る

○學問する者、只我智の
暗く、我徳の進まざる處を
憂ふ大和俗訓

○我小才智ギ技藝阿まると
も、矜る心ある可らず同上
○孟子曰く、原泉混混と

一、晝夜不舎、以科、
盈、而後進、四海、放、
る、

○書、不曰、く、山を為る、
と九、俛、功一、簣、不虧、く、
○晋、陶侃、朝、不百、甓、を齋、

外、不運、
ひ、暮、不、
名、齋、内、
不、運、ひ、
曰、く、過、
通、優、逸、



通、
該、也、

世々、恐くハ事ハ堪ハス
らん、

明治三十二年二月調査

代價

修身初訓卷之二終

明治十五年三月廿四日版權免許
同年五月刻成

編輯人 福岡縣士族 宮本茂任

同 縣士族 宗盛年

同縣同族 後進子手書

出版所 連壁製本會社

同縣同族 後進子手書